北里柴三郎の歩んだ道（2）～東京医学校に入学して～

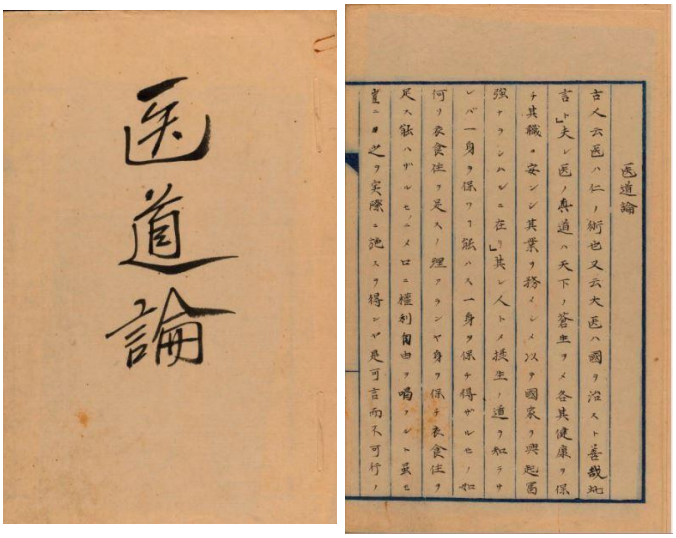
旧東京医学校本館（小石川植物園内）提供東京大学総合研究博物館

東京医学校に入った北里は、高度な授業内容に感銘を受ける一方で、生徒の個性と主体性を重んじたマンスフェルトの教育方針に改めて感謝の思いを深めました。そして、熊本医学校を出る際にマンスフェルトが語った言葉を思い出します。「医学の使命は病気から生命を守り予防することにある」。その言葉に導かれるように、北里は予防医学を生涯の仕事とすることを決意しました。

東京医学校は、明治 10（1877）年には「東京開成学校」と合併して、東京大学医学部となります。校長は、日本人の長与専齋でしたが、教師陣は「お雇い外国人」と呼ばれる明治新政府が雇った人々で、東京医学校の場合は、ドイツ人がほとんどでした。現在でも医師は診察記録のことを「カルテ」と呼びますが、この言葉はドイツ語です。医学分野では、こうしたドイツの知識を輸入した影響が今でも多く残っています。

東京大学医学部全景　提供東京大学総合研究博物館

北里は、この東京大学である人物と出会うことになります。それは、後年、黒死病（ペスト）調査のために北里とともに香港に赴くことになる青山胤通でした。こんなエピソードが残っています。ある日、外国人医師からの質問に青山がうまく答えられないでいるのを見た北里は、つい笑ってしまいました。それを見た青山は大いに怒り、手に持っていた骨格標本の大腿骨を握りしめて、振り向きざまに北里の頭を殴ろうと襲いかかってきたのです。結局その場は何とか収まりましたが、青山の怒りは消えることなく、北里のことをひどく恨みました。そしてこの学生時代の些細な出来事は、図らずも後の北里に大きな影響を与えることになります。



演説原稿「医道論」表紙と 1 頁
【提供】学校法人北里研究所北里柴三郎記念室

青山をはじめ東京大学では多くの出会いを経験した北里でしたが、実は在学中に自ら数十名の仲間を誘って「同盟社」という学生結社を組織しています。活動の中心人物として、北里は毎週土曜日に東京大学の大学構内で演説会を開催し、政治・外交・軍事・教育・医療などあらゆる分野の問題について活発に討論を行いました。

北里の演説の自筆原稿「医道論」が、港区白金の北里研究所北里柴三郎記念室に残されています。北里はこう語ります。「国の基本は国民の健康にあり、医学の基本は、人びとが健康を保てるように生命を病気から守り、病気を未然に防ぐ」ことにある。また、「今日の東京大学の医学生の半数は国民の血税を学資としている。税金は国民が一日も休む暇なく苦しい生活の中で納税した金である。その血税を無駄遣いし、自分の実力で学問が進歩するのだから国が資金を出すのは当然だと勘違いをしているのなら、とんでもないことである。このような卒業生が大学や病院に就職すると、栄華を求め、さらに医学を志す者がいなくなる。今から医学をめざすものは、医学の基本に立ち返らなければならない」。そこには、医学を志す北里の若い正義感と、その後の生涯を貫いた高潔な信念が何よりも雄弁に述べられています。